

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

靈柩車を見たら親指を隠すしぐさは、靈柩車出現以後に発生したものではないかと一応考えてみたが、指にまつわる民俗を改めて考えてみたい。

私たち日本人は、自分の身体を頭や髪、目・耳・鼻・口・歯、また身体から出る息・唾・糞尿にいたるまで、どのように捉えてきたかという問題があります。「人は生まれると、その人間を迎えた社会によって、身体が社会化され、文化化(差異化・差別化)される」と、妖怪研究で有名な小松和彦氏は身体と心性の民俗について述べている。手や指の問題も一つで、何かバツの悪い時に頭をかく。ちょっとごめんと、手刀を切って通過する。「なるほど!」とボンと手を打つ。こうしたしぐさも全て民俗社会での人間の行動の型で

あり、習わしだった。子供たちは「この子とこの子が喧嘩して……」と両手の指を合わせて、自分の指だけで遊んだり、約束をする時には「指切りゲンマン、嘘ついたら、針千本のーます」と切り口をした。八十八を迎えた男女は、半紙に自分が手形を押し、テハんで

(手判)を祝い返しに配り、門口にこのテハンドを貼つてもある家を以前はよく見かけた。かつて奈良県出身の著者、照葉は、仲たがいした男に真情を伝えようとして、小指の先を切り落とし、男に渡し、世間の評判になつた。エンガチヨやビビンチョなど、いじ

新聞報道もあった。

大阪で小児科医院を開きながら民俗研究に打ち込んだ沢田四郎作(1889~1971)は、幼

めまがいの遊びもある。近年、国会審議で、指をさして質問された副総理兼財務相が「やめた方がいい、無礼だから」と怒りをあらわにしたという報道があった。

新潟県北魚沼郡(現:長野県飯田市)では、蛇を指さすと指が腐る、畑の西瓜を指さすと腐る、墓

は決して指ささないと

い頃に祖母から「人に後ろ指をさされるな」と戒められていたが、1936(昭和11)年に「山

の事を忘れたか」というのを忘れたか」という興味深い論文を『旅と伝説』に寄せていく。指の民俗について①指さされることの不快②指さすことで災害邪悪に襲われるという感覚③指さしてはならないものは蛇、墓、

なりものであると指摘した。沢田の郷里・五位堂(香芝市)では、蛇を指さすと指が腐る、畑の西瓜を指さすと腐る、墓



夜の奈良町—奈良市芝新屋町で筆者撮影

指にまつわる民俗

う。こうした習俗は全国的に見られ、偶然指さしをした場合は、他人の人差し指で切るまねをしたり、唾液をかけたり、口に入れて、かめばよいとされた。沢田が集めた全国

の習俗の中には「葬式の行列に向かって指さすと、指が腐る」というものも、「葬式の爪を隠して行かぬと、親しい人に死に別れる(大阪府中河内郡)などが、親指を中にして握れば、親指を中にして握れば、バケモノに遭わない(新潟県北魚沼郡)、親指を中心にして握ると、狐にだまされない(長野県飯田市)」というのもある。

靈柩車を見たら親指を隠すという、まじないの先行形態は「葬式を見たら」というもので、「不用意に指をさすと、良くないことが身に降りかかる」と思っていたことや、「防ぐためには親指を隠すのがいい」とする俗信がすでにあったのだつた。(奈良民俗文化研究所代表)